

IDDNewsletter.....4

April



特集

文法指導に「デザイン思考」を ～視覚化・構造化による言語運用力の育成～

聾学校における言語教育は、「見て理解し、構造的に捉える」力が極めて重要です。これは、単に視覚に頼るという意味ではなく、意味と形式の関係を「構造」として可視化する教育設計が求められるということです。編集工学の視点から見れば、文法や表現の違いを「構造的に編集し直す」ことで、生徒にとっての理解可能性が飛躍的に高まることが期待されます。

文法指導に「デザイン思考」を ～視覚化・構造化による言語運用力の育成～

聾学校における言語教育は、「見て理解し、構造的に捉える」力が極めて重要です。これは、単に視覚に頼るという意味ではなく、意味と形式の関係を「構造」として可視化する教育設計が求められるということです。編集工学の視点から見れば、文法や表現の違いを「構造的に編集し直す」ことで、生徒にとっての理解可能性が飛躍的に高まることが期待されます。

文法理解に必要なのは、「目で見える構造」

聾学校において、日本語の指導は「耳から理解する言語」ではなく、「視覚で捉え、構造で整理する言語」へと再構築する必要があります。これは単に手話と音声言語の違いにとどまらず、「情報の捉え方」そのものを再編集する視点が求められる場面です。

本校の生徒たちは、一般の聴者が経験的・身体的に獲得する「文法的な直感」に乏しいため、ルールを構造的に、そして操作可能な形で提示する必要があります。これは編集工学の視点、あるいはグラフィックデザインにおける「情報の再構成」のアプローチに非常に近いものです。

私たちは、言葉を「知識のかたまり」として教えるのではなく、「ツールとして組み替えられる構造物」として教える必要があります。その意味で、文法指導は「デザイン」であり、「構造化」です。

クイズという編集装置：構造に気づくための仕掛け

では、どうすれば生徒たちにこの「構造感覚」を伝えられるのでしょうか。一つの答えは「クイズ形式」にあります。問いを提示し、それに対する複数の視点を提示することで、生徒自身が「意味の分岐」や「文の役割」に気づくように導くのです。

以下のような問いは、その入口になります。

「雨が降ったから地面が濡れている」と「雨が降ったので地面が濡れている」の違いは？

「私は秋刀魚を食べる」と「私が秋刀魚を食べる」の違いは？
「一時間食べる」と「一時間で食べる」の違いは？

これらの問いを通じて学ぶのは、単なる意味の違いではなく、**文の構成要素がどう相互に作用して、意味が生まれるかという「編集的な視点」**です。

クイズは、言語の構造を「動的に見せる装置」として機能します。正解のある問いだけでなく、複数の答えがありうる問いを投げかけることで、「言語は組み替え可能な構

造である」ことに生徒自身が気づき、発話や記述の場面でそれを活かせるようになります。

助詞の違いを「レイアウト」で可視化する

たとえば「から」と「ので」の違いを、単に「主観と客観の違い」と説明しても、生徒にとっては抽象的すぎて実感が伴いません。ここで、グラフィックデザイン的な手法が役立ちます。

時間軸を横に並べ、「出来事 A → 出来事 B」の流れを図にする。

そこに「発話者の意図」や「話の聞き手との関係性」といった情報層（レイヤー）を重ねる。

結果として、「から」は「自分の感情や理由を説明する文脈」、「ので」は「説明的で距離感のある表現」として視覚的に理解できます。

これは言語を、「構造として編集されたデザイン」として捉えるアプローチです。助詞の違いもまた、文の構成要素の「配置」や「優先順位」によって意味が変化するというレイアウト的な現象として指導することが可能です。

文法は「意味の重なりをどう裁断するか」の編集技術である

「私は秋刀魚を食べる」と「私が秋刀魚を食べる」の違いもまた、焦点と話題という編集単位の違いです。「は」はすでに共有された情報を「背景」として提示し、「が」は新情報として焦点を当てる。その違いは、「カメラのピントをどこに合わせるか」という視覚的なメタファーで説明できます。「文章を構成する各パーツは、どの順番で並び、どの役割を持つか」というのは、編集そのものであり、デザインそのものです。言い換えれば、文法教育とは「言葉をどう並べて、どこに意味を置くか」という編集トレーニングであるとも言えます。

このような観点から、授業での説明も「意味の裁断ライ

ンをどう引くか」という観点で組み立て直すことで、生徒にとって格段に理解しやすくなります。

教師の役割：直感の翻訳者から、構造の編集者へ

教師自身は、日本語を「自然に」使いこなしていますが、それゆえに「なぜその言葉を使ったか」を意識的に説明できないことがあります。しかし、生徒にとってその直感は「ブラックボックス」にすぎません。そこで教師は、「直感的な選択」を「構造的なルール」に翻訳する必要があります。

これはまさに、グラフィックデザインにおける「構造の明示化」と同じプロセスです。構造を開示し、各要素の意味と働きを明示することで、生徒もその構造に「アクセス可能」になります。

授業における教師の話し方、板書、教材配布、どれもが一つの「情報編集行為」です。だからこそ、授業そのものを「構造化された編集プロジェクト」として設計する必要があるのです。

クイズで引き出す学びの主体性と多様性

クイズは、単なる遊びや余興ではありません。むしろ、学びの「探究性」を引き出すきっかけになります。特に、文法という一見無機質で覚えづらい内容も、クイズ化することで「動き」と「選択」が生まれ、構造が浮き彫りになるのです。

さらに、正解が一つとは限らない問いでは、生徒それぞれの視点や考え方が可視化されます。これにより、「言語の柔軟性」や「表現の多様性」を自然と体感できるようになります。

教師はその答えを受け止め、意味の広がりを紹介しつつ、「この文脈ではこう使うのが自然だね」といった編集的な視点を提供することで、言語の使い方をデザインする支援者になれるのです。

まとめ：言葉を「再構成する力」が未来の力になる

最終的に目指すべきは、生徒が言葉を「使えるようになる」ことです。それはすなわち、「自分の思いや考えを、適切な構造で組み立てて表現できる」という力です。つまり、言語の「運用」とは、意味の編集であり、構造の再設計であり、自分自身のアウトプットをデザインすることにほかなりません。

文法は退屈な規則ではなく、「意味のブロック」です。その組み合わせ方を学ぶことで、生徒は自由に、自分らしく、世界とつながる言葉を持てるようになります。

その支援をする私たち教師もまた、「編集者」であり「デザイナー」なのです。

IDDN



Contents

特集1

2-3 文法指導に「デザイン思考」を ～視覚化・構造化による言語運用力の育成～

聾学校における言語教育は、「見て理解し、構造的に捉える」力が極めて重要です。これは、単に視覚に頼るという意味ではなく、意味と形式の関係を「構造」として可視化する教育設計が求められるということです。編集工学の視点から見れば、文法や表現の違いを「構造的に編集し直す」ことで、生徒にとっての理解可能性が飛躍的に高まることが期待されます。



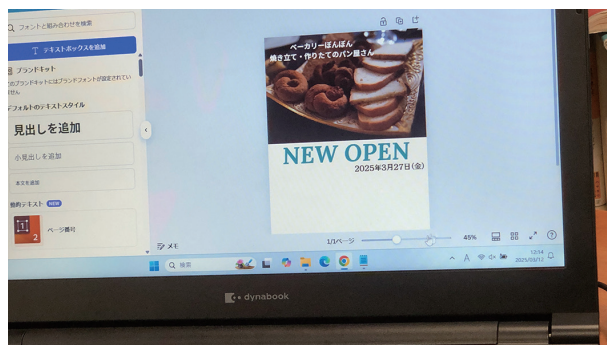
Welcome to Information Design Department!!

北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科「学科だより」を手にとっていただき、ありがとうございます。

令和6年度もいよいよ最後です。

今年度の取組について、単に前例踏襲で終わることのないよう、常に新しい属性を実装し、要素を拡張させ、より未来へ人がる技術として確立させていきたいと思います。

皆様、今後もよろしくお願いいたします！



情報デザイン科学科だより

Information Design Department

IDDNewsletter

April 2025 4

IDDNewsletter April 2025

発行人／北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科「学科だより」編集チーム

発行／北海道高等聾学校

〒041-0261 北海道小樽市銭函1丁目5-1

www.koutourou.hokkaido-c.ed.jp

※ご意見、ご要望などにつきましては、上記 Web ページより電子メールでご連絡ください。